

解 説



教育・研究機関における品質工学の展開 2015

— 親切な授業は良い授業? —

Development of Quality Engineering at Academic Research Institutions 2015 — Is a Kind Class a Good Class? —

水谷 淳之介*

Junnosuke Mizutani

山本 桂一郎*

Keiichiro Yamamoto

早川 幸弘*

Yukihiko Hayakawa

第15回 品質工学会学校関係者懇談会

開催日 平成27年6月14日(水)

場 所 品質工学会事務局会議室

主 催 品質工学会学校委員会

出席者 (五十音順)

糸久 正人	法政大学
上原 一剛	鳥取大学
小池 昌義	産業技術総合研究所
五味 伸之	福井工業高等専門学校
斎藤 之男	芝浦工業大学
田井 茂	日刊工業新聞社
高田 圭	セイコーエプソン(株)
西野 精一	阿南工業高等専門学校
二ノ宮進一	日本工業大学
早川 幸弘	富山高等専門学校
矢野 耕也	日本大学
矢野 宏	応用計測研究所(株)
山本桂一郎	富山高等専門学校
(司会) 水谷淳之介	富山高等専門学校

1. 「学校の声」から

水谷 第15回の学校関係者懇談会をはじめ。最初に斎藤氏より学会誌「学校の声」から話題提供願う。

斎藤 編集委員会で「学校の声」を担当するようになったが、簡単には原稿が集まらない。そこで問題提起として、編集委員長の矢野(耕)氏が「学校の声」

に「大学教育における品質工学」を投稿した(品質工学, Vol.23, No.3, 2015, pp.63-66)。ここには学校の状況がよくまとめられているので、これについて学校関係者間の議論が発展すればと考えている。矢野(耕) 執筆当初、「学校の声」の原稿の集まりが悪かったが、よく考えてみるとこれは自らの問題をさらすことにもなるので、誰もが二の足を踏んだのだと思う。私が所属する学科は経営工学系であるためか、機械工学系のような設備もほとんどなく、ものづくり的な要素は薄い。品質工学はものづくりがあって成立するものなので、その不安定な位置づけを「学校の声」に書いた。品質工学の問題ということで書き出したが、大学というよりも教育現場の問題、それから人材そのものの問題、最終的には産業界に跳ね返るのではないかという実感がある。教育で大事なものは伝えるべき中身であり、どのように教授するかのようなテクニカルな問題は本質的ではないが、多くの教員が感じる部分であることだろうと思い、板書の方法論について触れた。

二ノ宮 パワーポイントを使った授業から板書に戻したという話はとても同感する。私もスピードに問題があり板書に戻した。学生とやり取りしながら授業を進めようとする、パワーポイントでは早すぎてうまくいかない。板書は学生が理解している度合いを測りながらやり取りできるのでちょうど良い。

矢野(耕) どんなことでも、聞き手の理解に合わせるということは重要ではないだろうか。パワーポイントは一方向に発信するには優れたツールなのかも知れないが、理解力がない人や聞く気がない人には効果的でない。板書する内容をプリントして配るこ

* 富山高等専門学校